

(4) School Innovation セミナー in 宮崎

① 基調講演 文科省生涯学習政策局情報教育振興室長 新津勝二 視学官

国の情報教育に関する取組方針についての説明があり、子どもたちのICT環境が我々の想像以上に進んでいることについてのお話もあったが、『子どもたちのタイピングが遅い、社会に出てICTを使いこなすために、タイピングは身に付けるべき技能だ』というお話は、我々が今まで取り組んできた指導は古いから変えないといけないという訳ではない、という内容が逆に新鮮であった。また、環境整備について、市町村による格差が広がってきていることが紹介され、それぞれの自治体が情報教育について正確な情報を把握する必要がある、ということをお話された。

② 九州の先進事例紹介

熊本県、佐賀県、宮崎県の学校での実践事例が紹介された。宮崎大学の新地辰朗教授のお話の中で、環境を整えるためには予算が必要であり、その予算を獲得するためには、校長をはじめとする学校のリーダーが、ICT活用の効果を理解することが必要である。また、「ICT機器が導入されたから何かができるようになるというような簡単なものではなく、教科書やノートという今まで使われてきたものと、新しく導入されるICT機器とを組み合わせ、新しい時代の学習プロセスを“設計”するのが教師に求められる力である。」という言葉は、たいへん重みのあるものとして印象に残った。

③ パネルディスカッション

「アクティブ・ラーニングとICT活用」というテーマでの議論であった。宮崎大学の新地氏から、「今、大学の図書館はアクティブ・ラーニングの会議場のように改築されている」という発表があった。私学が先んじているものの、アクティブ・ラーニングはもともと大学改革の目玉であった。高大接続改革実行プラン(H27.1.16)などが発表され、いつの間にかすべての教育現場でアクティブ・ラーニングがもてはやされている。また、熊本県山江村教育長の藤本誠一氏からは、「学習規律という基盤があってこそ、ICT活用が開く」、「協働的な学びの充実のために、教師のファシリテーションが重要」などの意見があった。

宮崎市教育情報研修センター次長の牧野宏紀氏からは、宮崎市も中核市であるが、ICT環境はたいへん遅れてしまっているという報告や、逆に鹿児島市学習情報センター主幹の木田博氏からは、鹿児島市の進んでいる状況の説明などもあった。

富士通株式会社文教ビジネス推進統括部長の瀬戸芳彰氏からは、こういった状況を踏まえて、企業としてはどのように対応しているのかなどについてのお話があった。

ICT環境を十分に生かせるかどうかは、教師の力量にかかっている。考える場を作るだけでは不十分で、思考を可視化・外化させ、学びの変容を把握し、支援することが必要であるという意見が出された。

④ 終わりに

今回の参加者(約150名)の中には、市町村の議員が1割ほどいるということが紹介されていたが、実践事例の発表者やパネリストが、ほとんど校長や教育長であったことから、時代に遅れている九州南部のICT環境整備を加速したいという自治体の思いと、適切な情報提供をしたいという、日本教育情報化振興会(JAPET)や日本教育工学協会(JAET)などとの思いが合わさって実施されている研究発表会であると感じた。なお、研究会冒頭で、一切の録音・撮影を禁止するという連絡があったので、会場写真等の掲載は差し控える。